



先日、修了した大学院の研究室から葉書が届いた。今年度をもって定年退職される教授の最終講義の案内だった。オンラインで開催される予定らしい。私の学生時代最後の「先生」であるその教授は、演習でも論文指導においても強く助言を請わない限り意見を述べられなかった。内容も具体性はほとんどなく、あくまで議論や研究の方向性を示すに止まっていた。学部時代のゼミの教授がどちらかといえば懇切丁寧に指導されるタイプだったので当初は困惑したが、院生ならば当然かと自らの甘えを恥じた。だが、学部生に対しても同様のスタンスであつたらしい。中世王朝文学（センター試験過去問や模試にもよく出題されていますね）が専門である教授の演習では、一つの作品を1年以上かけて扱った。週に一度の演習に担当者が一人ずつ割り当てられる。担当者は担当する部分の翻字から行い、自分なりの本文解釈を発表する。当日、それを基に協議することで演習が成り立つので、担当者の責任はそれなりに重い。準備に当たっては大学図書館の蔵書では事足りず、他の大学や研究機関等に情報請求することもある。一回の演習準備に約1～2ヶ月ほどかかる。担当は年に数回、回ってくる。他の講義や演習もある。もちろん学生たるものその生活は学業が主であることが前提だが実際は学業以外も何かと忙しい。それでもゼミ生は皆、「よく調べていますね」（＝示された根拠に基づいたあなたの本文解釈は、新たな論の一つとして妥当とみなされます）という滅多にない教授の言葉を引き出すべく、計画的に根気強く取り組んだ。何よりも、先行研究が浅い分野の作品を自分達の手で解き明かしてゆく過程は純粋にわくわくした。古典文学という学問の底知れぬ深淵のほとりに導かれ、少しだけその水面に触れさせてもらった2年間だった。私はその淵に飛び込むことなく今に至るが、教授には学びを深めることの厳しさと醍醐味を教えていただいたと思う。

学びたいことが学べるということは非常に幸せなことである。いまの学びはこれからの学びへと直接的あるいは間接的につながっている。教科に限らず、あらゆる学びの過程そのもので学ぶ「こと」も生涯を支える力になると信じ、学べることに感謝の気持ちを忘れず、これからも励んでほしい。

月	日	曜	行事予定（3年に関するもののみ）	朝	夕	備考
2月	15	月	二次特編授業・自宅学習者登校日	×	×	8：15校門通過
	16	火	二次特編授業 学年末テスト	×	×	8：15校門通過
	17	水	二次特編授業	×	×	8：15校門通過
	18	木	二次特編授業	×	×	8：15校門通過
	19	金	二次特編授業	×	×	8：15校門通過
	20	土	土曜講座B			
	21	日				
	22	月	二次特編授業最終日・自宅学習者登校日	×	×	8：15校門通過
	23	火				
	24	水				
	25	木	国公立大学前期試験			
	26	金	国公立大学前期試験・代休日（28日分）			
	27	土				
	28	日	卒業予定者セミナー・同窓会入会式・予行など	×	×	8：15校門通過